

2014年11月30日 主日礼拝

説教「神は私たちとともに」

イザヤ書7章1-17節

【紀元前734年】

「それゆえ、主みずから、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産み、その名を『インマヌエル』と名づける」（14）という預言が語られたのは、紀元前734年。当時の世界最強国はアッシリヤ。北王国イスラエルはアッシリヤに怯えて、隣のアラムと同盟を結び、南王国ユダもこの同盟に加えようとした。ところが、ユダの王アハズは、これを拒否したので、イスラエルとアラムの連合軍がエルサレムを攻撃します。エルサレムは守られたのですが、動揺は続きます。そこで、行動を起こされたのは神さまです。だれも願わないうちから、神さまが行動されたのです。

「気をつけて、静かにしていなさい。恐れてはなりません。あなたは、これら二つの木切れの煙る燃えさし、レツィンすなわちアラムとレマルヤの子との燃える怒りに、心を弱らせてはなりません」（4）とイザヤを遣わして、語らせてくださったのです。アハズ王を惜しみ、ユダを惜しまれたゆえに。

【私は試みません】

けれどもアハズには信じる事ができません。だから神さまはアハズに、「しるしを

求めよ」とおっしゃいました。神さまは、ほんとうに私たちひとりひとりの弱さをご存じです。しるしをみなければ、見えない神さまを信頼することができない人には、そのように、弱い者には弱い者として配慮して下さるのです。

ところがアハズは、最初からアッシリヤと手を結ぶつもりでした。神さまではなく、暴虐で有名なアッシリヤを信頼しようとするのです。しるしを求めようもしないのです。その愚かさに、神さまは、なおあわれみを募らせ、「それゆえ、主みずから、あなたがたに一つのしるしを与えられる」（14）とお語りになります。ご自身からしるしを与えとおっしゃる。なんとかしてアハズをご自分に立ち帰らせようとする神さま。そうしないではおられない神さまなのです。

【処女がみごもっている】

「処女がみごもって」（14）は、イザヤの時代には起こっていません。それは、主イエスだけに起こりました。だからこの神さまからの預言は、イザヤにとってもどういうことであるのかは、はっきりとはわからないことでした。それでもイザヤは大きな励ましをいただきました。このインマヌエル預言に、神さまのあわれみを見ていたからです。神さまと共に生きる人びとを愛し抜く神さまの愛を見たからです。その愛は歴史を貫いて、い

つまでも続きます。「インマヌエル」は、「神は私たちとともにおられる」という意味。神さまは、歴史を貫いて神の民と共に生きてくださる、だから神さまは、イザヤの時代のユダも救ってくださる、と信じる事ができたのです。いつか救い主であるメシアを送ってくださるといふことも。またやがて、すべての被造物を新しくして涙をぬぐい去ってくださることも。

【クリスマス】

やがて、お生まれになった主イエスこそ、インマヌエル、神は私たちとともにおられる、という名前をもつお方。ただ用心棒のような神さまが共にいてくださる、だからだいじょうぶというわけではありません。そうではなく、神が人となってくださった、私たちと同じになってくださった、私たちの弱さを、人間として知ってくださった、のです。もちろん、神さまは何でもごぞんじなのですが、今度はそれを、いわば内側から知ってくださいました。弱いということはどういうことかを知ってくださり、弱さゆえに痛むということがどういうことかを知ってくださいました。それを知らないままで放っておかれなかったのです。ともにいてくださるのは、このような神さまです。このような神さまとともに、私たちは歩いていくことができるのです。弱いながらも、たがいを力づけ合いながら。